

『浮雲』の接頭辞「御」について

平 林 一 利

The prefix "御" in "UKIGUMO"

Kazutoshi Hirabayashi

豊岡短期大学 論集

第 14 号 別 冊

平成 30 年 2 月 28 日 発 行

『浮雲』の接頭辞「御」について The prefix “御” in “UKIGUMO”

平林 一利

Kazutoshi Hirabayashi

はじめに

敬称の接頭辞である「御」は、「おほん・おん・お・み・ゴ・ギョ」と読むことが可能である。しかし、特に古典文献では、漢字1文字で「御」と表記されていることが多く、その読みの確定が困難である。「御」の読み・用法については、これまで多くの研究がなされており、近世から近代の資料を対象とした研究では、「お／ゴ～する」「お／ゴ～なる」のような敬語動詞の成立や待遇表現についての研究が多く、また、近年では、国語教育、日本語教育などの分野において、「御」の用い方などに焦点があてられている。^(注1)「御」の読み方を中心に論じたものは、中古から中世の資料を対象としたものは多くあるが、近代の文献を対象としたものは多くないように思える。^(注2)

そこで本稿では、近代の「御」の読みについて、二葉亭四迷著の『浮雲』を資料とし調査、報告をする。『浮雲』は、1887年（明治20年）から1889年（明治22）にかけて発表され、近代小説における言文一致文体の嚆矢の一つであり、近代語研究の重要な資料である。^(注3)したがって、近代における「御」の読みを考えるうえで必要な資料であると考ええる。

『浮雲』の本文は、漢字仮名交じり文で書かれているが、「御」に相当する部分の多くが仮名書きであり、また漢字表記であっても振り仮名が施されているため「御」の読みを確定することができる。さらに『浮雲』は、いわゆる総ルビの表記形式であるため、「御」が冠する語の読み方も確認することができ、その結合形式も確定することができる。

1. 『浮雲』に見られる接頭辞「御」

この節では『浮雲』に見られる「御」のデータを示す。

本稿で使用したデータは

半澤幹一・服部隆（2009～11）「二葉亭四迷「浮雲」の電子データ化およびそれに基づく各種索引と研究」^(注4)

に納められている

- ・ f 2. 新編浮雲（再版）本文
- ・ f 3-1. 新編浮雲（再版）語彙索引

を利用した。また、本文の確認には、f 2・f 3-1の底本である、『リプリント日本近代文学館 26 新編『浮雲』再版』（2005 平凡社）を用いた。

上記 f 2・f・13 から接頭辞「御」に相当する用例の検索を行い、異なり語数 213 語、延べ語数 1244 例を抽出することができた。ここから、「お政・お勢・お鍋」など人名に「御(お)」が冠したものや、「御輿^{みこし}」など一語化し接頭辞として認めにくいものを除き、さらに「眼(め)、目(め)」などの表記の異なるものをまとめ、189 語 633 例を抽出した。そして、『浮雲』に見られる「御」の読みである「お・おん・み・ゴ・ギョ」が、「和語」「漢語」「混種語」「外来語」のどの語種に冠しているのかで分類をした。これを、延べ語数、異なり語数でそれぞれ、表 1・2 として示し、表 3・4 にそれぞれの%を示す。

表1 述べ語数

	和語	漢語	混種語	外来語	計
お	469	42	4	0	515
おん	1	1	0	0	2
み	1	1	0	0	2
ゴ	2	106	0	0	108
ギョ	0	7	0	0	7
計	472	157	4	0	633

表2 異なり語数

	和語	漢語	混種語	外来語	計
お	127	20	3	0	150
おん	1	1	0	0	2
み	1	1	0	0	2
ゴ	2	32	0	0	34
ギョ	0	1	0	0	1
計	131	55	3	0	189

表3 述べ語数%

	和語	漢語	混種語	外来語	計
お	74.0%	6.6%	0.6%	0.0%	81.2%
おん	0.2%	0.2%	0.0%	0.0%	0.4%
み	0.2%	0.2%	0.0%	0.0%	0.4%
ゴ	0.3%	16.7%	0.0%	0.0%	17.0%
ギョ	0.0%	1.1%	0.0%	0.0%	1.1%
計	74.7%	24.8%	0.6%	0.0%	100.1%

小数点第2位四捨五入

表4 異なり語数%

	和語	漢語	混種語	外来語	計
お	67.2%	10.6%	1.6%	0.0%	79.4%
おん	0.5%	0.5%	0.0%	0.0%	1.0%
み	0.5%	0.5%	0.0%	0.0%	1.0%
ゴ	1.1%	16.9%	0.0%	0.0%	18.0%
ギョ	0.0%	0.5%	0.0%	0.0%	0.5%
計	69.3%	29.0%	1.6%	0.0%	99.9%

小数点第2位四捨五入

表 1～4 を見ると、『浮雲』の「御」の読みは、延べ語数で「お」81.2%、「ゴ」17.0%であり、異なり語で「お」79.4%、「ゴ」18.0%である。「お」と「ゴ」で、延べ語数 98.2%、異なり語数 97.7%と、この二つの読みに集中していることがわかる。他の読み方である「おん」「ギョ」「み」の使用率は、0.4～1.1%であり、異なり語数もそれぞれ 1、2 例認められるのみである。また、『浮雲』には外来語の使用例があるが、中世キリシタン資料や、現代語に見られる、「おタバコ」「おりボン」など、外来語に「お」が冠した例が見られなかったことは注目される。

また、「お」+和語、「ゴ」+漢語を原則形、「お」+漢語、「ゴ」+和語を非原則形とした場合の非原則系の使用例はこれまでも報告されているが、『浮雲』においても、異なり語数で「お」+漢語 20 語 (10.6%)、「ゴ」+和語 2 語 (1.1%) が見られ、「おん」+漢語と、「み」+漢語はそれぞれ 1 語 (0.5%) であるが使用されている。

2. 「おん」「み」「ギョ」について

この節では、「おん」「み」「ギョ」について考える。これらの使用例は、「おん」2 語 2 例、「み」2 語 2 例、「ギョ」1 語 7 例であった。延べ語数で 2%未満であるが、まずこれらの例を考えてみたい。以下例を示す(____は筆者)

①今年の晩には御地^{ことし くれ おんち まみ}へ参られるとは知りつゝも(第1編 第1回 11 頁)

②お政もスコだれの拍子^{まき ひやうしぬ}抜けという光景で〈略〉またもや御意^{ごい}の變^{かは}らぬ内にと挨拶^{あいさつ}も匆々^{さそ／＼}に起ツ

て坐敷^{ざしき}を立出^{たちい}で（第1編 第5回 101頁）

- ③御同僚方^{ごどうりやうがた}の尊大^{そんだい}の風^{ふう}を御誹謗遊^{おひぼうあそ}ばすが御自分^{ごじぶん}は評判^{ひやうばん}の氣六ヶ敷屋^{きむつしや}で御意^{ぎい}に叶^{かな}はぬとなると瑣細^{ささい}の事^{こと}にまで眼^めを剥^{むき}出して御立腹遊^{ごりつぶくあそ}ばす言^いはば自由主義^{じゆうしゆぎ}の壓制家^{あつせいか}といふ御方^{おんかた}だから哀れや・・・（第1編 第6回 105頁）

- ④課長殿^{くわちやうどの}は「見所^{みどころ}のある奴^{やつ}ちやト御意遊^{ぎいあそ}ばして御最負^{ごひみき}に遊^{あそ}ばすが（第1編 第6回 106頁）

- ⑤先頃^{さきごろ}もお手飼^{てがひ}に狎^{ちん}が欲しいと夫人^{ふじん}の御意聞^{ぎいきく}くよりも早飲^{はやのみ}込み（1編 第6回 107頁）

である。①は文三の居住地に対して用いられているが、文三の母親が文三へ出した手紙に用いられた例である。この例は、手紙の中の例で使われているため文語的表現が用いられ、「お」よりも畏まった表現であると考えられる「おん」を用いている。

②の「御意」は、文三の詫言に対しての、お政の許しの気持ちについて述べており、③④の「御意」については、昇の上司である課長の自分勝手な意向について述べられており、③の「御方」もこの課長に対してのものである。⑤も、この課長の夫人の意向を述べた部分である。他の「御意」も③④と同様の例である。これら③④⑤⑥の「御意」の例は、古めかしい上位の敬意表現を用いて、相手を賤しむ言動の表現であり、③の「御方」も同様である。

- ⑥先刻我輩^{さつきわがはい}が明治年代^{めいしねんだい}の丹治^{たんぢ}と云ツたのが御気色^{みけしき}に障^{さは}つたと（第2編 第10回 108頁）

- ⑦幕府倒れて王政^{わうせい}古^{いにしへ}に復り時津風^{ときつかぜ}に靡かぬ民草^{なび たみぐさ}もない明治^{めいし}の御世^{みよ}に成^なつてからは

⑥は、昇の言動に対し文三が気に障ったのではないかと、昇が文三の気持ちをお勢に述べた部分である。⑦は新しい元号の世の中の意で、固定された言い方である。

以上『浮雲』に見られる「み」「おん」「ギョ」の使用は、限られた用法と、固定した用い方がされている。他の近代の資料を調査する必要があるが、『浮雲』を見るかぎり近代においては、「み」「おん」「ギョ」の使用はあまり多くなかったものと思われる。

3. 「御」の表記から

「御」は漢字1文字で表記されることが多いため、その読み方を確定することが困難であった。この節では、『浮雲』の「御」の表記形式について考える。振り仮名と仮名表記をそれぞれ、発話・地の文とに分け、和語、漢語、混種語で示したものが表5である。

表5を見る限り、「お」が和語や漢語に冠するときは、仮名で「お」と表記される場合が多いが、「ゴ」「ギョ」「み」と読ませる場合は仮名書きの例は見られず、「御」に平仮名で「ご」「ぎょ」「み」が振り仮名で施されている。平仮名で振り仮名が振られていることについては、飛田良文(1968)では「あまり漢字に慣れていない層に、仮名で読ませ、漢字を示す」のように指摘している。

「お」に仮名表記が多く、「ゴ」に漢字表記が多いということは、「ゴ」は漢字の読みと認識され、漢語であるということが意識されていることの表れではないかと思われる。

「お」が振り仮名で表記されている例を示す。

地の文 「鉛華^{おしろい}」「慈母^{おふくろ}」 発話 「家大人^{おとつさん}」「慈母・令慈^{おつかさん}」「令妹^{おつかさん(注7)}」「令妹^{おいもとご}」

以上の6例である。これらの例は、まとまった漢字文字列に対する読みとして振り仮名が施され

ており、いわゆる熟字訓の用法で用いられているものである。

表5 「御」の表記

		和語		漢語		混種語		計
		仮名	振り仮名	かな	振り仮名	仮名	振り仮名	
	地の文	24	2	5	0	1	0	32
お	発話	97	3	15	1	2	0	118
	小計	121	5	20	1	3	0	150
	地の文	0	1	0	1	0	0	2
おん	発話	0	0	0	0	0	0	0
	小計	0	1	0	1	0	0	2
	地の文	0	1	0	1	0	0	2
み	発話	0	0	0	0	0	0	0
	小計	0	1	0	1	0	0	2
	地の文	0	0	0	11	0	0	11
ゴ	発話	0	1	0	22	0	0	23
	小計	0	1	0	34	0	0	34
	地の文	0	0	0	1	0	0	1
ギョ	発話	0	0	0	0	0	0	0
	小計	0	0	0	1	0	0	1
	合計	121	8	20	38	3	0	189

4. 中世の資料との比較

この節では、通時的な面から「御」の読みについて検討したい。「御」の読みに関する先行研究は多数あるが、ここでは、中世キリシタン資料を中心とした「御」の読みについて報告された、新藤喜代子^(注9) (1972) の論中で報告された口語的な資料である『天草本平家物語』のデータと比較する。『浮雲』が言文一致文体であるため比較対象として適切であると思われる。また、参考として、中世の文語的資料を調査した、平林^(注10) (2001) のデータも示す。

ただし、「み」と「ギョ」に関しては前節で述べたとおり、固定した用いられ方であると考えられるため本節では扱わない。『天草版平家物語』には「お」と「おん」が用いられ、『ロザリオ記録』は「おん」の例のみであるのでそれらも示し、「お」と「ゴ」の使用について検討する。また、表1～4で示した混種語については、重箱読み・湯桶読みの語をそれぞれ、漢語、和語に振り分けている。

表6 資料別語種割合

		和語	漢語	外来語
浮雲	お	83.0%	15.0%	0.0%
天草平家		94.0%	5.4%	0.0%
天草平家	おん	92.9%	7.1%	0.0%
ロザリオ		88.0%	9.0%	3.0%
浮雲	ゴ	3.0%	97.0%	0.0%
天草平家		2.3%	97.7%	0.0%
ロザリオ		3.0%	95.0%	2.0%

表7 資料別 読み割合

	お	おん	み	ゴ	ギョ
浮雲	81.0%	0.4%	0.4%	17.0%	1.1
天草平家	50.4%	12.2%	1.8%	33.4%	2.2
ロザリオ	0.0%	49.0%	5.6%	45.0%	0.4

*進藤氏の調査が延べ語数であるため、他の資料も延べ語数で示す。

表6から、「ゴ」+漢語の結合形式は、『浮雲』『天草版平家物語』、文語資料である『ロザリオ記録』においては使用率に差はほぼ無いといえる。しかし、「お」+漢語の使用率では、『浮雲』においてその使用率が、同じ口語的資料の『天草版平家物語』と比べて3倍弱増加しており、「お」が

漢語に冠する比率が高まっていることがうかがえる。また表7からは、「おん」「み」の割合が減少し、「お」の使用率が高まっていることがわかる。「お」の使用の増加は、近代において美化語的な用法が広がり、それが漢語に冠する場合にも用法が広がったものではないかと考えられる。

また、「ゴ」+和語については、もともと、非原則形の例が少ないが、『浮雲』では「ゴ尤も」、『天草版平家物語』では「ゴ計らひ (gofacarai)」「ゴ用ゐ (gomochij)」「ゴ許され (goyurusare)」、『ロザリオ記録』には「ゴ掟 (gouoqiet)」「ゴ告げ (gotçuge)」「ゴ計らひ (gofakarai)」「ゴ四人 (goyottari)」などの例がある。『浮雲』に見られる「ゴ尤も」は、現代語でも一般に用いられている固定した読み方であり、「ゴ計らひ」「ゴ許され」「ゴ告げ」は、現代でも「お」と結合することが一般的である。残りの「ゴ用ゐ」「ゴ掟」は、一般的な用法においては、接頭辞「御」との結合は見られないと思われる例である。

5. 結合の観点から

「お」+和語、「ゴ」+漢語のような「和語」と「和語」、「漢語」と「漢語」という結合形式は、『ロドリゲス日本大文典』^(注12)で述べられているように、異なる語種の結合ではなく原則的な結合形式であり、中世でも一般的なものであり、現代においても一般に見られる形式である。本節では、これに合わない非原則形の「お」+漢語の結合に焦点をあて、特に「御」に結合する漢語の字音について述べる。なお、1節で「おん」「み」「ゴ」の例は述べているので本節では対象としない。

前節で「お」+漢語の例については、美化語的な用法ではないかということを述べたが、「お」+漢語は異なった語種が結合した例であり本来異質な結合形式といえるものである。ここでは、呉音・漢音という観点からその結合について考えてみたい。呉音は、平安期に「正音」と呼ばれる漢音に対して「和音」とも呼ばれ、古く日本に移入され日本語の中に深く定着していったとされる漢字音である。

『浮雲』に見られる「お」+漢語の例を示すと以下の20例である。(数字は使用度数)

「^き気2」「^{きやく}客3」「^{けし}ケシ (芥子) 1」「^{けしやう}化粧1」「^{さとう}砂糖」「^{じぎ}辞儀1」「^{しかく}癩1」「^{じやま}邪魔1」「^{しやうぐわつ}正月1」「^{じやう}嬢8」
 「^{せじ}世辞3」「^{せわ}世話4」「^{そし}祖師1」「^{ちや}茶3」「^{でし}弟子2」「^{てんき}天気1」「^{にかい}二階1」「^{べんたう}弁当3」「^{やくにん}役人1」「^{りつぱ}立派1」

この単語の1文字目の漢字音を、呉音・漢音で分類すると次のようになる。

漢音 3例

「^き気」「^{さとう}砂糖」「^{じやう}嬢」

呉音 11例

「^{きやく}客」「^{けし}ケシ (芥子)」「^{けしやう}化粧」「^{じぎ}辞儀」「^{じやま}邪魔」「^{しやうぐわつ}正月」「^{せじ}世辞」「^{せわ}世話」「^{にかい}二階」「^{べんたう}弁当」「^{やくにん}役人」

漢音・呉音共通 3例

「^{しかく}癩」「^{そし}祖師」「^{てんき}天気」

慣用音 3例

「^{ちや}茶」「^{でし}弟子」「^{りつぱ}立派」

以上である。20例中11例が呉音で読まれていることがわかる。また、慣用音は日本語的な発音として考えられるものである。

漢語の移入の歴史を考えれば、奈良時代後期から平安時代初期において漢音が移入し、それまで用いられていた呉音が和音と呼ばれるように、呉音は日本語の中に溶け込んでいるものと考え、「お」が冠した漢語が呉音で読まれるものが多くあるということは、古くから日本語の中で用いられ、日本語の中に溶け込み、漢語という意識が薄れた結果ではないかと考えられる。

また、共通の音を持つものが3例見られるが、このうち「癪」は国字であり、『日本国語大辞典 第2版』には、室町時代末期の例が初出として示され、「積」の呉音からという語誌が付されている。また「祖師^{そし}」は、『性霊集』『観智院本三宝絵』など平安中期の例が示されている。そして「天気」は、平安期初期の例が取られていることなどから、古くから日本語の中で用いられている語であると考えられる。

参考までに、『ロザリオ記録』に見られる、「おん」+漢語の例を見ると、

「死骸 (xigai)」（呉・漢）・「慈悲 (jifi)」（呉）・「守護 (xugo)」（呉）・「食物 (xocubut)」（漢）・「恥辱 (chijocu)」（呉・漢）・「知恵 (chiye)」（呉・漢）・「約束 (yacusocu)」（呉・漢）・「礼 (rei)」（漢）

のように、呉音2例、漢音2例、共通4例である。現代では、「慈悲」は両用^(注13)されるかと思われるが、「守護」「恥辱」の2語は「ゴ」が冠することが一般であり、「知恵」「約束」「礼」は「お」が冠することが一般である。

それぞれの初出例を『日本国語大辞典 第二版』で引き年代別に分類すると（書名の数字は同辞典に示された年代）

「礼」『十七箇条憲法』604

「慈悲」『法華義疏』7c 前

「知恵」『法華義疏』7c 前

「死骸」『類聚国史』178・疾疫・大同三年 808

「守護」『靈異記』810～824

「約束」『聖徳太子伝暦』917 頃か

「恥辱」『九曆』逸文・承平七年 937

「食物」『文明本節用集』室町中

以上のようになる。「食物」以外、上代から中古期に見られる古くから日本語の中で用いられている語である。また、「食物」については、『日本国語大辞典 第二版』の語誌に

「史記」「漢書」など漢籍に見られ、日本でも記録体系統の語として一般化していたが、その読み方は明らかでない。〈中略〉漢音のショクブツも「文明本節用集」「日葡辞書」に見られ、〈中略〉一方、上を漢音、下を呉音で読むショクモツの形も、「易林本節用集」などの辞書類に見られ、後にはこれが一般化する。

とあり、これも古くから日本で用いられていたものと考えられる。「食物」は、現代では「お」が冠する例は見られないと思われるが、「おん」が文語的な畏まった表現であることを考えれば、中世のキリシタン資料に見られる例は、美化語的なものではなく、敬意表現として用いられている^(注14)と考えれば説明ができるのではないだろうか。

「お」+漢語のような非原則形の表現については、「お」が冠する語に呉音読みをしているという特徴が見られた。これは、呉音が古くから日本語の中に取り入れられ、いわば日本語化しているものと

考えることができよう。つまり、意識の上で、「お」と言う和語系の接頭辞と結びつけることに違和感を持たなくなっているものと思われる。

6. まとめと課題

本稿では『浮雲』に見られる接頭辞「御」の読みについて報告し、過去の資料などと対比し検討してきた。

『浮雲』に見られる「御」の読みは、多く原則形によっているが、中世末期の資料と同じく非原則形も存在する。しかし、「お」+漢語の結合形式を持つ非原則形の場合、漢語の音の多くが呉音で読まれていることが注目される。これは、漢字音移入の歴史を考えると、平安期において漢音を正音、呉音を和音と読んでいたように、日本語の中に定着し、いわば日本語化したものであったことが窺えることから、異なった語種の結びつきという意識は薄れていたのではないかと考えられることを述べた。また、『浮雲』では、「お」+漢語の使用率が中世資料よりも高いことを指摘し、これも「お」と結合する漢語の読みが呉音のものが多く、漢語が日本語の中に溶け込み、当時の日本人にとっては、漢語という意識が薄れている結果ではないかということをも述べた。

本報告は『浮雲』に見られる例を述べたに過ぎない。同時代の他の資料を広く調査する必要がある。また、位相による用いられ方の違いなどもあるが、それぞれの例を精査する必要がある。以後の課題としたい。

注 1 小松寿雄 (1967) 「「お……する」の成立」(『国語と国文学 近代日本語の研究』昭和 42 年 4 月特輯号 東京大学国語国文学会)

辻村敏樹 (1968) 「近世後期の待遇表現」『敬語の史的研究』笠間書院)

『問題な日本語 1』「おビールをお持ちしました」「ご連絡／ご連絡」の項など (2004) 大修館書店

山田健三・奥瀬真紀「敬語接頭辞「オー／ゴー (御)」の使い分け原理試論—ポライトネス理論の観点から—」(『信州大学人文科学論集 1 2014.3』) など

注 2 望月郁子 (1970) 「源氏物語における敬語の接頭辞ミについて」文学 38 巻 3 号

関 一雄 (1976) 「源氏物語会話文における敬語の接頭語ミ・オホンの用法」文学 言語と文芸 83 など

中世では、

辻村敏樹 (1968) 「吉利支丹関係資料に見える敬語接頭辞について」(『敬語の史的研究』笠間書院)

新藤喜代子 (1972) 「敬語接頭辞『御 (オ・オン・ミ・ゴ・ギョ)』について」(国文目白 11 号 日本女子大学国語国文学会)

近藤政美 (1979) 「キリシタン資料 ローマ字本『コンテンツス・ムンジ』における敬語接頭辞「ゴ」「ギョ」「おん」「み」について」(『松村博司先生古稀記念国語国文学論集』 笠間書

院)

林 重雄 (1984) 「「サントスの御作業」における敬語接頭語について」(石川工業高等専門学校紀要 16)

平林一利 (1994) 「キリシタン資料における外来語に冠する「御」をめぐって—「御クルス」を中心として—」(文学論藻 67 東洋大学国文学研究室)
などがあげられる。

注 3 『浮雲』の書誌については、『日本語研究法 【近代語編】』青葉ことばの会編 おうふう の付録③ 高木 元氏執筆に詳しい。

注 4 科学研究費補助金(基盤研究(C)) [二葉亭四迷「浮雲」の電子データ化およびそれに基づく各種索引と研究] (平成 21~23 年度、課題番号 21520480、研究代表者 半澤幹一) による。

注 5 外来語に冠する例がないためここでは表に示さない。

注 6 飛田良文 (1968) 「井上勤訳『月世界旅行』のふりがな—漢字カタカナ交り文から漢字平がな交り文へ—」(『文芸研究』58 日本文芸研究会)

注 7 また、この例の「慈母・令慈」^{おつかさん} ^{おつかさん}については、その発話者と受け手などについて差があると思われるため精査する必要がある。課題としたい。

注 8 注 1, 2 参照

注 9 注 2 新藤 (1972) 参照

注 10 平林一利 (2001) 『ロザリオ記録』の「御(ゴ・ギョ・おん・み)」について (埼玉短期大学研究紀要 第 10 号)

注 11 新藤 (1972) では、「ゴ」+和語の例が示されていないため、平林一利 (1993) 「キリシタン資料を中心とした「御」の読みについて (1)」東洋大学大学院紀要 文学研究科 31 東洋大学大学院 のデータを示す。

注 12 土井忠生訳 (1955) 『ロドリゲス日本大文典』三省堂 569 頁~570 頁に、「ゴ・ギョ」は漢音に結合し、「お・おん・み」は和語に結合するという記述がある。

注 13 「お慈悲」「ゴ慈悲」のように、同一語に別の「御」の読み方がされることは、キリシタン資料で明らかになっている。注 2 辻村、近藤、林、平林 参照

注 14 キリシタン資料の使用例は、美化語的な用法というよりも、敬意表現として用いられている。

注 2、辻村 (1968)、新藤 (1972)、近藤 (1979) 参照

参考文献

1. 『日本国語大辞典 第二版』(2000~2001) 小学館
2. 山口 洋 (2015) 「四捨五入した%の合計が 100%にならないとき」佛教大学社会学部論集 第 60 号

【付記】本稿は、2016 年 3 月 13 日に、第 200 回 青葉ことばの会 (於、明治大学) で口頭発表したものを修正・加筆したものである。席上多くの貴重なご意見を賜りました。記して感謝申し上げる。